

雅ねえの、みんなで取り組む

獣害対策講座 Vol.6

※タイトルに記載している『雅ねえ』の表記は、本人の原稿どおりで掲載の了承を得ています。

おさらいと予習

早いもので講座も6回目。手元に六月号がある人は野菜の話と合わせてお読みくださいな。

【前回】

前回は牧草のイタリアンライグラスさえ食べれば、イノシシ、シカなんてどんどん増える。イノシシやシカを営農見直しのきっかけにしてほしいってこと話したつもり。

【今回】

今回は、何気なく畑に放置したり、竹林とかに投棄した作物残渣の話。無意識の餌付けをきっかけに、動物が私たちの楽園づくりを始める。動物の種類もどんどん増えるってお話したよ。

見えてきた物語

広島県の海辺にある、戸数50ばかりの集落に行ってきた。最近、イノシシやタヌキ、アナグマにやられてわずばかりの水田や畑も、作付たけれど、植えればやられるにきまつって耕作放棄地がどんどん増え始めたところ。

みんな、何とかしたいと思ってる。

それぞれが思い思いに対策はやってきたけど被害は増えるばかり。もう、あきらめるしかないのか？

そんな時、女性中心で獣害対策をはじめ、活性化しちゃった島根県的美郷町の取り組みがNHKで流れた。

とにかく一度来てほしい。まずは畑や集落歩いてみたら。これほどピュアに被害激化の物語を残した集落はないって感じた。

畑の外、どの畑も過去に捨てられ続けた野菜残渣。

朽ちて半ば堆肥化した去年のナス、誘引紐ごと捨てられたキュウリやトマトの茎。

加えてその上に今年捨てられた巨大な黄色い採り忘れのキュウリや半ば腐った尻腐れトマト。

残渣の山のまわりはいたるところにアナグマの堀跡。

そして周辺の草むらや林縁部にはイヌビワ、クワ、ビワ、アケビにキイチゴといった動物たちの好む草木。

【プロローグ】

始まりは焚火の自主規制？

「昔は、スイカのツルとか片づけるときは敷き藁ごと集めてその場で燃やしていた。けど、焚火するのと同じくらい残渣だけでなく可燃ゴミの段ボールとか木箱とか燃やしてしまう。」

そんな頃、ゴミの野焼きが問題になり、焚火禁止の条例とともになんとなく、焚火はダメみたいな風潮が広がって、畑の残渣も邪魔にならぬ畑の畦や林縁部に野積みするようにになった。

余ったジャガイモの種イモ、塔立ちしたハクサイやダイコン、細いイモと根の付いたサツマイモのツル、また遅なり果、取り残し果実のついたナスやカボチャの茎葉、さまざまな野菜残渣が年中捨てられる。

【第一章】

動物による動物のための楽園づくり

そうして動物による動物の楽園づくりという物語は始まった。

残渣の捨て場は、ミミズやコオロギ類も多い。イタチや

テン、アナグマ、タヌキといった動物が寄ってくる。そして食べたろうんこする。うんこから、よそで食べてきたイヌビワ、クワ、キイチゴ、アケビなんかの種が発芽して育つ。直接食べられる野菜クラスに、残渣の捨て場にはコオロギ、バッタなども多い。そして自分たちがうんこでふやしたアケビ、クワ、キイチゴがますます増え、動物たちの楽園づくりが進むとともに、より簡単に満腹できる畑の農作物に手を出す動物も増えてきた。

